新・下野市風土記

昔から日本人は温泉が好き

下野市教育委員会　生涯学習文化課

11月になるといよいよ本格的な冬の季節となります。現代人は木枯らしに吹かれて寒い中、家路についても直ぐ暖房で体を温めることができます。では、古代の人々はどうだったのでしょう？竪穴住居には囲炉裏やカマドしかありません。また、屋根は茅葺きのため、火で屋内を温めようとしても大きな火力を使うと火事になってしまいます。時折、火事になってしまい、家財道具（主に残っているのは土器などですが）が置かれたままで出土することがあります。以前、食事をしていた時に火事になったのか、5人分と想定される土器が家の中にほぼ車座に置かれた状態で発見された住居跡を見たことがあります。恐らく失火です。また、これは推測となりますが竪穴住居では、暖をとるためや明かりとり、そのほか茅葺き屋根を長く持たせるためなどからほぼ継続的にカマドや囲炉裏に火が灯されていたと考えられます。

時代が少し下って鎌倉時代頃の遺跡から直径30～40センチメートルの大きさの素焼きの火鉢が市内でも出土します。最近ほとんど火鉢を見ることがなくなりましたが、日本人はおよそ800年、炭と火鉢を使って暖をとっていました。また、自治医科大学の南側の住宅地の開発に伴う調査で中世の下古舘遺跡からは「温石」が出土しています。ちょうど葉書くらいの大きさで、厚さ3センチメートル程度の耐火性石材の上部に直径約1センチメートルの穴が開いています。火鉢などで温めて布の袋に入れて懐に入れ暖をとるために使用します。「懐石料理」の懐石とはこの石のことを指します。では、ほかに暖をとるためにどんな方法があったのでしょう。残念ながら古代の出土遺物では分かりません。ただ、都内などの遺跡からは、江戸時代の陶器製の湯たんぽが出土します。また、こたつに使用した瓦質の四角い火鉢なども見つかります。戦前の民具として残されているものとほぼ同じものが江戸時代の後半頃から使用されていたようです。出土資料では分かりませんが、文献史料では約1200年前にまとめられた『出雲国風土記』に当時、温泉ブームがあったことが記されています。大約すると「河のほとりと海辺に温泉があり、男も女も老人も子供も温泉に毎日道路に列をなすほど人が集まるので、市が立つほどの盛況でお湯につかるときれいになり病気もたちまち治り、皆酒宴を開いている」と記されています。

日本中著名な温泉はたくさんあります。例えば愛媛県松山市の道後温泉は『日本書紀』にも記されており、兵庫の有馬温泉は神代の頃から知られており秀吉もよく訪れたといわれています。県内では義経の家来である源有綱が再起を図るために潜んでいましたが、米の磨ぎ汁で発見されてしまった「源三窟」で有名な塩原温泉もあります。きっと傷を癒したのでしょう。歴史的に著名な温泉である道後温泉や群馬県草津温泉、長野県諏訪温泉の付近では縄文時代の遺跡も発見されおり、かなり昔から温泉は利用されていたようです。

『駿河国正税帳・正倉院文書』天平10年（738）の記録には、平城京居住の従四位下小野朝臣牛養（貴族階級の人）が病気療養として那須の温泉に行くため駿河国（静岡県）を通過した際、従者を12名連れており駿河国の六郡を通過するのにおよそ6日かかるので78人日分の食料を支給するよう請求した記録が残っています。当時の貴族は大勢の供を引き連れ、東海道の各国（今なら県）に旅費・経費を要求して那須まで保養に来ていた訳です。今では考えられないですね。